metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by
provided by DSpace at Waseda U

クアウテモク銅像の移転問題

山　﨑　眞　次

初めに

スペイン人の侵略者と最後まで戦ったアステカ王、クアウテモクは現在もメキシコの英雄のひとりである。1521年５月、スペイン軍は湖の小島に築かれたアステカ帝国の首都テノチティトラン（現在のメキシコ市）を陸上と水上から攻撃した。三ヶ所の堤道から攻め込んだスペイン軍と、同盟したトラスカラらのインディオ兵たちは、家を破壊し運河を埋め、湖上からはベルガンティン船で攻め立て、アステカ軍を徐々に都の北にあるトラテロルコに追い込んでいった。完全に退路を絶たれ、食料も尽きたアステカ軍は王を守ろうと最後の抵抗を試みた。しかし、矢尽き、刀折れ、橋頭堡の大神殿が陥落すると、クアウテモクは数名の部下を連れて船で逃亡を図るが、スペイン軍の捕虜となった。スペインの軍司令官エルナン・コルテスの前に連れ出された王は、コルテスの剣を指して、自分を殺すように頼むと、周りのスペイン人やアステカの兵は涙したと記録されている。その後、コルテスのホンジュラス遠征中に謀反の罪を着せられ、敗軍の将は絞首刑にされる。[1)]

侵略者に果敢に抵抗したクアウテモクは、スペインから独立後、メキシコの英雄として崇拝され、1887年にレフォルマ通りにその銅像が建てられた。[2)] その後、この銅像は1949年、レフォルマ通り整備計画によって、西に約80メートル移動させられ、市を南北に貫くインスルヘンテス通りとの交差点上に置かれた。

2003年に都市整備計画が立案されると、王の銅像を1949年まであった元の場所に移す計画が持ち上がった。レフォルマとインスルヘンテスという幹線道路

の交差点に銅像があることによって、著しい交通渋滞が発生していたからである。だが、銅像移転が計画されたのは交通渋滞だけが原因ではない。市長アンドレス・マヌエル・ロペス・オブラドール（以後AMLOと標記）は空洞化した市中心部を再開発することによって、活力を失った市街地と商業地区の活性化を図り、併せて景観の改善を目指した。市中心部の再開発は周辺の高級ホテル、レストラン、ブテック、宝石店、ディスコに市民と外国人観光客の足を運ばせることによって、経済活性化を目論むものであった。しかし、この再開発計画に全市民が賛成したわけではなかった。レフォルマ通りが走るクアウテモク地区とフアレス地区の住民は、歴史記念物の軽視、街路樹の伐採による景観・環境の悪化、工事による騒音公害などを理由に反対運動を展開した。

本稿は、メキシコの英雄、クアウテモクの銅像移転に関して巻き起こった論争に焦点を当て、市報、新聞報道、インタビューを主な資料として歴史記念物保存をめぐる有識者、行政、民間資本、住民運動間の連帯と反発を分析するものである。

新聞記事に掲載された像の高さ・重量、移転の予算・時間・参加者数等の数字には若干の違いがあるが、誤記と判断される場合を除き、そのまま記載した。

Ⅰ．銅像の設置

1821年にスペインからの独立を達成したメキシコであったが、その後、自由主義派と保守派の対立、米墨戦争の大敗、独裁者サンタ・アナの復帰と追放、フアレスの改革と内乱、フランスの干渉等の内外の難問を抱え、近代国家の建設の歩みは思うに任せなかった。フアレスが1871年に大統領に再選され、近代化が促進されるかに見えたが、翌年、フアレスは急死し、メキシコの政界は再び混乱に陥った。この政争に終止符を打ったのがポルフィリオ・ディアスである。ディアスはフアレス派の政敵を倒し、1877年の大統領選で勝利を収めた。その後、1910年のメキシコ革命勃発までポルフィリアートという独裁政権を牛耳った。

19世紀後半のメキシコには、米国とフランスから干渉を受けたことによって、排外的空気が高まり、それがメキシコのナショナル・アイデンティティを求める運動を生み出していた。独立戦争で殉死したミゲル・イダルゴやモレロス、そしてフランスの支配を駆逐したフアレスは、国家防衛のシンボルとして、また国民団結の精神的柱として政府・国民の注目を集め、メキシコ各地で建国の英雄たちを称揚する行事や活動が盛んに行われるようになった。その結果、彼らの銅像が建てられたり、目抜き通りにその名が冠せられた。[3] とりわけ征服者スペイン軍に最後まで抵抗したアステカ王クアウテモクにたいする関心は高く、アステカ最後の王の銅像をメキシコ市のメインストリートであるレフォルマ通りに建設しょうとする気運が盛り上がった。その熱気に促されて、ディアスは1877年、勧業省大臣ビセンテ・リバ・パラシオに命じて銅像のコンペを競わせた。応募作品の審査の結果、メキシコの古代美術を生かしたスタイルを提案した建築家のフランシスコ・ヒメネスが当選した。マヤ建築の至宝、ウシュマルとパレンケの宮殿をモデルとしたピラミッド型の台座は、フランシスコ・ソサが設計し、４面にアステカ王クイトラワク、テスココ王コワナコツィンとカカマツィン、タクーバ王テトレパンケツァル、トラスカラ王のシコテンカトルのレリーフを彫り込んだ。銅像のデザインはミゲル・ノレニャが担い、助手のガブリエル・ゲラ、エピタシオ・カルボ、ヘスス・コントレラスが鋳型を製作した。[4] 落成式の日取りについて議論が分かれたが、結局、スペイン人が財宝のありかを白状させるためにクアウテモクの足を火炙りにした８月21日に行うことで落ち着いた。コンペから10年後の1887年８月21日、レフォルマ通りに王たちのレリーフが刻まれた台座とその上に槍を構えて立つクアウテモクの像が設置され、緑豊かな木々に囲まれた銅像の傍らには石のベンチが置かれた。そして、銅像は1949年まで62年間同地に鎮座していた。同年、フェルナンド・カサス・アレマン市長の時代にレフォルマ通りは改修されて、そのとき銅像は元の場所から西へ80メートルほど離れたインスルヘンテス通りとの交差点に移転され、毎年哀悼記念日（クアウテモクが処刑されたとされる２月28日）

には、クアウテモクへの表敬記念行事が行われている。

Ⅱ．移転計画

先ずメキシコ市側の資料に基づいて移転計画を概観する。メキシコ市が立案した「クアウテモク銅像の移転と修復計画」の工期は、2004年４月13日から11月９日までの期間で、1,200万ペソの予算が計上されている。請負会社はCAV建築デザイン社、市の担当部署は土木局である。作業は、重量4.2トン、高さ4.2メートルの銅像と重量360トン、底面積6.2メートル四方、高さが11.75メートルの台座を北東に88メートル移動させることである。移転の目的は、市の二つの大動脈レフォルマとインスルヘンテスの交差点における交通渋滞の解消と劣化した銅像の修復である。

５月の記者会見で、まず市の観光局長フリエタ・カンポスが銅像移転の趣旨を説明した後、土木局長セサル・ブエンロストロは、事前に国立考古学歴史学研究所（INAH）と国立芸術研究所（INBA）の事前承認が必要であること、銅像の解体、台座の切石の番号付け、銅像と土台の修復に1,200万ペソを要すること、再開発が市街地の歴史的環境を損なわないように細心の注意をもって実行されることを記者団に述べた。続いて、観光局統計課長フランシスコ・ルイス・エレラが現在、ラッシュ時に9,500台の車が殺到する交差点を通過するのに一台15分かかるが、移転後は５分に短縮されるというデータを示した。

カンポスは、市の交通局と観光局はメキシコ国立自治大学（UNAM）建築学部と協力して、2003年７月から交差点を含めたレフォルマ周辺の新しい市街図を作成してきたことを明らかにし、歩行者も新設置場所のほうが銅像を安全に見物できると付け加えた。さらにすでに「レフォルマ通り再開発計画」に３億1,400万ペソの公的資金と1,300万ドルの民間資金が投入され、当該市街地が歴史的経済的に改善されたことを報告した。[5] 市の役人と企業人の合同記者会見で、再開発による経済効果については、６月にメキシコ経済界が投資を促進し、商業と観光を活性化するとコメントしている。メキシコ経済界の各セク

ターは、計画が投資を促進し、レフォルマ地区を国の重要な観光スポットに回復させるために不可欠な事業であると強調している。不動産企業、ダノス・グループの責任者は、何十年も懸案であったレフォルマへの回帰を切望した市民の声に応えて、市は、税制優遇措置、悪化した治安の回復、荒廃した地区の刷新によって投資を呼び戻したと、述べた。市のホテル協会会長は、再開発によって首都の観光イメージが改善され、安全性を信頼した観光客が増加し、客室利用率が大幅にアップしたことに言及した。

カンポスは、INAHの歴史記念物審議会と歴史記念物外部諮問委員会は精力的な指導を実施し、すでに計画に賛成していることや、移転と修復の調査は著名なUNAMの建築学部長フェリペ・レアル、資材はUNAMの工学研究所長ロベルト・メリが担当することを強調し、銅像を庭園風の近代的ロータリーに移転することを報告した。[6)]

７月22日、INAHは市役所が二つの損害保険に加入し、移転に関する合法的行政諸要件を満たしたことを確認して銅像移転を承認した。翌23日、クアウテモク像本体と14個のブロンズ片は修復工房が設置されたパスツール公園に移された。修復責任者であるリカルド・プラドは、王冠やジャガー等のブロンズ片は傷みが少なく、簡単な洗浄で修復が可能であるという見解を発表した。また、15名の専門家が修復を担当することを付け加えた。一方、市の戦略計画部長は、台座は２週間後に新ロータリーに移転されると発表した。[7)]

８月７日（土）の零時から８日（日）の22時までレフォルマ通りの移転関連区間と周辺の道路が封鎖され、350トンの台座と15トンの付属物が２台の500トン用大型クレーンと２台の小型クレーンによって運搬されると、市庁の幹部たちが発表した。また、カンポスはパスツール公園に移された銅像の修復過程は13日から15日までの３日間、午前９時から午後６時までの時間帯で一般公開されることを明らかにした。[8)] 観光局長のカンポスは、８月13日（金）、アステカ帝国の首都テノチティトランが陥落した483周年記念日にパスツール公園の工房を落成した。式典ではミクトラテクトリ民族舞踊団が古代の踊りを披露し

て、花を添えた。[9)]

以上の市報とは別に、観光局戦略計画部観光整備課長フアン・カルロス・フエンテス氏から提供された銅像移転に関する資料を参照すると、時系列的記述ではないが、より詳細な本移転計画が明らかになる。

「市の銅像移転計画書」

1．銅像の歴史

1869年、フアレス大統領時代にクアウテモク像がビガ通りに建設された。（この最古のクアウテモク銅像の消息は不明である。）ディアス時代の銅像建設のコンペには５つの作品が出品され、「真、美、益」の標語を打ち出した建築士フランシスコ・ヒメネスが当選した。しかし彼は1884年死亡したために建築士のラモン・アヘアがプロジェクトを受け継ぎ、ヒメネスの先スペイン期の主要な文化遺産を記念碑の装飾に取り入れるというアイデアを作品の中に生かした。メキシコを代表する彫刻家ミゲル・ノレニャが彫刻と装飾を担当して、南面のクアウテモクの捕囚の場面のレリーフを描き、ガブリエル・ゲラが北面の拷問の場面を描いた。台座のジャガーのレリーフはエピタシオ・カルボが担当した。1887年８月21日、大統領ディアスによってレフォルマ通り第３ロータリーで落成された。1949年、カサス・アレマン市長の時代にレフォルマ通り改修のために銅像は解体され、レフォルマとインスルヘンテス通りの交差点に移転された。

2．第３期レフォルマ通り観光・文化開発（2004）：レフォルマ通り、インスルヘンテス通り、クアウテモク銅像の調和が目的

・レフォルマ通りのインフラ整備

・レフォルマとインスルヘンテスの交差点における交通渋滞の解消

・交通の流動性、歩行者の安全、交差点付近の景観の改善：加えて、パスツール公園脇に新しい上院議員会館の設置

・UNAMの建築学部は交差点の新図面とクアウテモク銅像を元の場所に移転するプロジェクトを提案
・工事は市の土木局、公共安全局、交通局が担当し、INAHが諮問機関となる。

2004年１月12日、INAHの歴史記念物審議会にプロジェクトが提案され、承認された。それを受け、INAHに該当する認可申請が行われ、同研究所は建設工期ごとの以下の事項を承認した。

・試掘、測量、地質調査の認可
・基礎工事掘削の認可
・ブロンズ片の解体の認可
・工事用踏み台設置の認可
・ブロンズ片修復の認可
・銅像移動ロジスティックスの認可
・台座移転ロジスティックスの認可
・切石修復の認可
・“イスリータ”（小島：新ロータリーのこと）実行プロジェクトの承認

交差点付近は市の重要な都市空間であるにもかかわらず、近年、歩行者の安全性、銅像の損傷、交通渋滞が問題化していた。そのため新ロータリーにおける左周りは禁止され、緑地の再構築のために合法的に113本の木々が伐採された。

新ロータリーの総面積は32,000㎡、そのうち8,500㎡は台座部分、18,000㎡は舗装区域、5,300㎡は緑地である。パスツール公園脇には上院議員会館の建設が予定され、新ロータリー付近の荒廃ビル３棟は現在ホテルに修復中である。

市の記者会見と「銅像移転計画書」から明らかなように、銅像の移転は2003年から開始された「レフォルマ通り観光再開発計画」の一環として実施された。

この計画には民間投資も含めて巨額の資金が投入された。1970年代に、低所得者層が市の中心部に進出してきたために有産階級が郊外に移転する、いわゆるドーナツ化現象が起こった。その結果、旧市街やそれに隣接するレフォルマ通り沿いの建物が荒廃し、空家すら見られるようになった。このように衰退した市のダウンタウンを再開発することによって、住民と観光客を呼び戻し、住環境の改善と経済発展を図ったのがメキシコ民主革命党（PRD）の市長アンドレス・マヌエル・ロペス・オブラドール（AMLO）である。

Ⅲ．新聞報道

市が推進した銅像移転計画に市民がどのように対応したのか調査するために、移転の経緯を報じた新聞記事を時系列的に列挙する。

銅像の移転計画が世間の耳目を引いたのは、2003年12月のことである。メキシコ国立自治大学（UNAM）建築学科主任のフェリペ・レアルは、交通循環性を考慮して、クアウテモク銅像を1949年以前に設置してあった場所に移動する計画が市庁との共同プロジェクトとして検討中であることを発表した。[10] 銅像はレフォルマとインスルヘンテスという市の大動脈の交差点にあり、交通の循環性を阻害するばかりか、車の排気ガスと騒音が深刻な環境問題を生み出していることが移転の理由である。

市庁は、インスルヘンテス通りからブカレリ通りにかけての歴史区域の権限を所有している国立考古学・歴史学研究所（INAH）の歴史記念物審議会に移転の申請書を提出したが、この移転計画に一部の市民から抗議の声が上がった。これにたいして市の観光局長フリエタ・カンポスは情報不足によるものであるとして、近隣住民の理解を求めた。[11] 翌日、銅像の移転は交通の循環性と環境問題の解決の視点だけからではなく、像の損傷の修復もその目的であることが市役所から発表された。像を解体修復後、元の場所、レフォルマ通りの88メートル東に移動し、そこに小広場を建設することによって像の劣化を早める排気ガスの影響を減少させる計画である。市の土木局長セサル・ブエンロスト

ロはすでに民間資金も含めて10億13百万ドルが投資され、INAHとINBA（国立芸術研究所）の承認のもと、1,200万ペソの予算で268,227㎡の改修が行われると発表した。[12)]

PRI（制度的革命党）の市会議員マヌエル・ヒメネスが移転反対の先頭に立っていることで混乱が生じていることを憂慮して、メキシコ市長AMLOはレフォルマ通り沿いの市街地開発を擁護した。しかし、反対派はPRIの議員だけではなく、PAN（国民行動党）の議員やフアレス地区の住民も共闘していることが明らかになった。[13)]

６月２日のエル・ウニベルサル紙は「それでもクアウテモクは動く」という記事で、INAHの修復家リカルド・プラドの指揮下、12トンの銅像を1949年まであった場所に北東へ88メートル移動させるプロジェクトが進行中であることを伝えている。INAHのルベン・リッチネルは、「研究所ではすでに移転計画が承認されている。技術的、ロジスティクな面での調査不足から未だに許可が下りていないが、市がINAHの歴史記念物審議会にプロジェクトを提出すれば、１週間以内に承認されるだろう」とコメントした。市の観光局長フリエタ・カンポスは、INAHの承認以外にも銅像周辺の並木の配置や下水溝の存在が問題として残っているが、移転の目的は交通渋滞の緩和、元の場所に戻すという歴史的意味、修復による尊厳の回復であると発表した。市は市街地再開発に2003年の第１段階で１億2,400万ペソを、2004年の第２段階では１億ペソの支出を見込み、銅像の移動に1,200万ペソ、下水整備に720万ペソ、中央分離帯設置に807万ペソと試算している。[14)]

これら移転賛成派にたいして、反対派は今回の移転を疑問視し、移転は像を蔑ろにする不敬な行為であると非難した。「レフォルマ救出会」のスポークスマン、アレハンドロ・ガラテは市条例100号の都市開発法に依拠して市庁、文部省、INAH、INBAを相手取り、移転阻止の行政訴訟を起こすと発表した。ガラテは市観光局と土木局に建設費、環境に与える影響、移転のアセスメントについて情報を要求したが、いまだに回答がないと市役所を批判した。[15)]

市の観光局戦略計画責任者のフランシスコ・ルイス・エレラは「観光局はINAHの要求にひとつひとつ答えてきた。INAHの最後の認可を待つのみで銅像の移転を中断する理由はなにもない」と強気の発言をした。一方、「救出会」はロータリー周辺でドライバーに、市がINAHの要求に応えていないことと技術的要件を満たしていないことを記したビラを配り、反対者を募った。これに対してルイス・エレラは、INAHは事前調査、並木の剪定、測量、掘削、基礎工事、銅像の解体・修復等を市に許可したことを明らかにした。[16)]

７月23日の記事は「7,800万ペソをクアウテモクに」という見出しで始まる。市は当初4,000万ペソであった予算を7,800万ペソに増額し、銅像を修復のために近くのルイス・パスツール公園に移動することを発表した。ルイス・エレラによれば、銅像は台座からクレーンで取り外された後に箱に収められ、ポリウレタンで固定される。移動先の公園で洗浄された後に、８月16日に新しいロータリーに再設置される。翌24日には新聞に「クアウテモク、着地」という記事が踊った。13時35分に開始された作業は移転を歴史にたいするテロと見なす救出会の抗議の中、２時間５分かかった。重さ4.5トン、高さ４m、直径５mの銅像は55年間据えられていた場所から３分で降ろされた。ドライバーや通行人は地上から40メートル持ち上げられた銅像に見とれ、この歴史的事件を目撃したことで感涙した人もいた。土台の上に１時間置かれている間に、アステカの子孫と称する二人の踊り手、センヨアトルとトナリは歌と踊りで皇帝に敬意を表し、移動中の無事を祈願した。ほら貝の神秘的響きに見物客が静まりかえる中、二人は神に移動の許しを求める祈りを捧げた。技術者たちが移動の準備をする間、二人の先住民は天に香を焚き、赤いダリアを像の足下に献花した。センヨアトリは、「全市がクアウテモクのものであるから、像をどこに運ぼうが問題はない」と語った。反対派の諦めと野次馬の解散の中で作業が終了すると、市の責任者ブエンロストロが満面の笑みを浮かべたことを皮肉っぽくエル・ウニベルサル紙は伝えている。[17)] パスツール公園に移された銅像は100年以上も露天に晒されていたことによる塵芥と酸化物の除去と洗浄が施され、仕上げに

ラッカーが塗られた。市によれば、銅像の洗浄・修復に1,200万ペソの予算措置が取られた。

８月６日（金）午後10時、銅像周辺の道路が封鎖され、地下２メートルに埋め込まれている重量350トンの台座の移動が、500トン用のクレーン２台、120トンと180トン用の補強用のクレーン各１台を使って行われた。９時間の入念な下準備の後、台座を基礎から分離し移動台に据えつける仕事に２時間かかり、その後80メートル北へ運搬された。技師、建築家、修復家、INAHの職員等350人以上が携わったこの作業は土曜日の14時半に終了し、交通は17時には正常化した。見物客200名を収容できる桟敷が設置されたが、観客は一人も来ず、また「救出会」の姿もなかった。一方、パスツール公園に運ばれたクアウテモク銅像には臀部に0.5センチの弾痕の傷跡が発見され、また、耳飾のひとつが欠落していることが確認された。野晒しの銅像は全体が排気ガスや塵芥によって酸化していた。12名の専門家が公園の仮設工房で５ヶ月間、傷んだ銅像の修理とコーティングに従事する。その間、同公園では修復中の銅像が一般公開されると、エル・ウニベルサル紙は伝えている。[18)]

12月10日（金）23時に移動用のクレーンがパスツール公園に到着し、保護用のポリウレタンに覆われた銅像を吊り上げて運搬台に載せた。交通量が減少した零時40分に像はレフォルマ通りを搬送され、二人の先住民が吹くほら貝の音に祝福されて、午前２時40分に新ロータリーの台座に据えつけられた。重さ4.5トン、高さ４メートルの銅像の移動は圧巻で、通行人はしばし足を止め歴史的光景に見とれた。[19)]

同月14日午前７時、伝統衣装をまとった先住民６名がほら貝を吹き、香を焚き、供物を銅像に捧げて、祝福するなか、メキシコ市長、AMLOは2004年７月に開始されたインスルヘンテス通りからブカレリ通りまでの1,122メートルに及ぶレフォルマ通り周辺第３期工事の竣工式のテープをカットした。市長は式辞のなかで、「何か新しいことを試みると、常に反対があるものである。理に適った反対もあれば、行政の長を失脚させるような政治色を帯びた反対もあ

る。工事を妨害するような行動もあったが、我々は今日、ご覧のように計画を実現した。2001年に開始されたレフォルマ・旧市街再開発計画はフアレス広場とアラメダ公園の改修で終了する。」と反対勢力を牽制するとともに、工事がほぼ計画通りに進行していることに満足感を示した。式後、自信に満ちたメキシコ市長は観光局長カンポス、土木局長ブエンロストロ、運輸局長ガルドゥーニョなどの市の役人や報道陣などおよそ200名を従えて整備地域を視察した。[20)]

Ⅳ．住民の反対

前述したように、反対運動の先頭に立ったのは、アレハンドロ・ガラテ・ウルチュルトゥがスポークスマンを務める「レフォルマ救出会」である。「救出会」は2004年３月４日、市会議員に対して樹齢100歳にもなる樹木の伐採反対と19世紀以降保たれてきた銅像を中心にした歴史的大通りの偉観喪失について陳情した。PAN、PRI、緑の党は同会のメンバーの話に耳を傾け、計画中の移転作業について市に情報開示を求めることを約束し、PRIの市会議員ハイメ・アギラルはメキシコ市の歴史遺産のひとつを改変するような暴挙を中止すべきであると述べた。PANの議員マリアナ・ゴメス・デルカンポは、市街地改修プロジェクトは実施前に住民の意見聴取をするべきであるとして、すでにレフォルマ再開発プロジェクトの中止を要請する決議を市議会に提出したと発表した。会合終了時に、建築士のアドリアナ・バルデスは市が、国家遺産である大通り改修計画以前にINAHの専門家による調査を指示するように要求した。グループはレフォルマ通りの西で計画されている環状陸橋建設についても拒否することを表明し、現在まで市の市民対応局次長と２回の会合を持ったが、公式見解は受け取っていないと不満を露にした。[21)]

2004年６月４日、PRIのマウリシオ・ロペスとPANのマリアナ・ゴメスは、レフォルマ再開発計画に２億2,500万ペソの支出が必要とされ、市は、2003年の第１期に１億2,400万ペソを、2004年度には１億ペソを予定していることを明ら

かにした。そして、2004年の第２期に銅像移転に1,200万ペソの予算を計上しているが、2,700万ペソに増加される可能性にも触れた。また、アレハンドロ・ガラテは、１世紀以上もメキシコ人の公共の場としての銅像が置かれた歴史的地域を汚すばかりか、歴史記念物を保全活用する条例を犯しているとして、銅像移転を回避するため、市にたいする庇護権を提出する意思を表した。[22)]

この元市長の甥は、観光局が未だにINAHに技術的提案書を提出していないことを非難し、「救出会」のメンバーは下院に赴き、市の計画を差し止めるように下院議員に介入を申請したことを公表した。ガラテによれば、INAHの認可責任者は、調査と要件を満たしていないという理由で、記念碑移転場所を承認していないという文書を「救出会」に発行した。[23)] ６月22日、「救出会」のメンバーはマリアナ・ゴメス市会議員を伴い、“市長の気まぐれから”始まったこの都市計画を非難し、環境にたいする影響と交通計画に関する調査を実施すること、２地区の５つのコロニーの住民の意見を聴取すべきことを市に要求した。また、同会の弁護士団が国家歴史記念物毀損の責任を問う訴訟を準備中であることを明らかにした。[24)]

７月５日、PRI、PAN、緑の党の下院議員と市会議員はクアウテモク銅像移転計画を直ちに中止することを市長のAMLOに要求するために、「救出会」のメンバーと会談した。下院議員とPRI、PAN、連帯、緑の党の市会議員たちは、レフォルマにあるロータリーの改修と銅像移転は市民権と歴史記念物侵害であることを表明した。市長が、住民の不満の声やレフォルマ改修に否定的なUNAMの美学研究所の意見を尊重していないことや地下鉄用の予算を道路改修費用に転換したことを非難し、市政を壟断する市長の市民を無視した権威主義体制と戦うことを宣言した。[25)]

「救出会」は移転工事に保険が掛けられていないことを公にするとともに、「市は、事前の諮問もなく市の主要道路の伝統ゾーンの変更と交通循環性重視の観点から歴史的記念物を移動させようとしている。レフォルマ通りの刷新は、ホテル業界を活性化し新しいオフィスビル群や住宅を建設するために、民

間主導で行われている。」と市の行政を攻撃した。建築学会長のガブリエル・グティエレスは、「市民の憲法上の権利にもかかわらず、レフォルマ改修プロジェクトは事前に諮問されなかった。レフォルマ通りはメキシコ国民のものであるから、異なる学会が関与して、決定は市ではなく国がするべきものである。」と表明した。[26]

INAHの歴史記念物コーディネーターのラウル・デルガードは住民の反対運動にたいして、行政との不毛な対立には関心がなく、文化的知識の蓄積が大事であると答え、「クアウテモクよ、おまえを間近に見てからというもの、おまえは以前のおまえではない」と銅像の芸術的魅力が市民の関心を惹起していることを付け加えた。一方、建築家のホルヘ・レゴレッタは、銅像移転の総合プロジェクトに関する情報不開示は「英雄たちに対する車の勝利」という印象を市民に与えると、市を批判した。[27]

銅像移転とは別に、ローマス地区住民連合は、市長が推進するローマス地区の環状歩道橋建設は環境保護法、都市発展法、歴史記念物法、都市遺産保護法に違反し、レフォルマ通りのロータリーとクアウテモク銅像移転に関して、市長は民間に投資するように強要したと非難した。この住民連合の非難に対して、環境保護局のクラウディア・セインバウンは、企業人アリエル・ブロムベルがレフォルマ通りの環状歩道橋建設現場近くにラス・トーレス・オプティマスとペリフェリコ高速道付近にトーレ・エスメラルダを建設する際に、市から便宜を受けた見返りに環状歩道橋を寄付したと述べた。また、環境保護団体の会長クリスティナ・アルカヤガはPAN、PRI、PEVMの市会議員の支援を受け、現在進行中の３つの工事（銅像移転、ロータリーの建設、環状歩道橋の建設）における環境に対する影響調査とINAHの認可を公表するように市に要求して、レフォルマの工事に反対し、連邦政府の介入を要請した。[28] 膨大な予算が組まれたこの再開発においては、市行政と民間企業との癒着も取沙汰された。３億7,500万ペソが投入されたレフォルマ開発計画には高度の土木技術が必要とされ、多数の建設関連企業が参加し、業界が潤ったと言われている。[29]

Ⅴ．レフォルマ・旧市街区回廊への民間投資

2003年１月21日、市役所、テルメックス（Telmex）、市街地電気エネルギー社（LyFC）の三者はレフォルマ・旧市街地活性化協定に調印した。2003年度、市は３億3,500万ペソを、民間企業は10のプロジェクトに200億ペソを投資した。市長のAMLOは上記２社とレフォルマ・アラメダ・旧市街区の観光回廊の統合的活性化で協働するために署名したのである。LyFCが行うリエハ通りからインスルヘンテス通りまでのレフォルマ回廊における地下電力網の拡張によって、将来の電力供給が安定し、それが地域の発展と観光活性化に貢献するとみなされた。同社は第１期計画で９千メートルの地下配線を達成した。一方、市は中央分離帯と歩道の舗装化、街灯の設置、緑地の改善、道路の拡張を担った。回廊活性化第２期では上下水道、電話通信、電力、ガスの改善化、マンション、歩道の建設、街の外観保全、照明設置、パトロールの強化、露天商の退去等が行われた。Telmexは市の事業に協力することによって、ケーブルを銅線から光ファイバーに変更するなどインフラの拡大と近代化がレフォルマ回廊周辺の利用者の改善に繋がると述べている。[30)]

2004年４月、AMLOは旧市街区を視察後の記者会見で、旧市街区は先スペイン期、植民地期、現代の３つのメキシコが表象された多様な空間で、国と地方の公共セクターだけの資金ではなく民間投資も集中する場であり、公的資金10億ペソ、民間資金100億ペソがすでに投資されたことを強調した。また、市長は、アルゼンチン通りに1,400万ペソを投じて建設した340の露天商用の商業プラザの落成式に出席したときの演説で、この広場建設によって路上で販売するインフォーマル・セクターの人々の収入の安定化と治安の改善、街路の衛生向上が図られ、旧市街区における公共サービスが活性化されると述べた。[31)] しかしながら、実際は、投資は歴史伝統ゾーンの東側、旧市街区にはあまり向けられなかった。668ブロックのうち34ブロックだけが再開発の対象となり、300ブロックはわずかに手が加えられただけであった。地区の東側には今でも露天商が溢れ、売春が横行している。インフォーマル・セクターの露天商は金融地

区から地区の東に追い払われ、そこでは店舗を構える商人たちとの軋轢が増加しているのである。露天商たちを金融ゾーンから追放しても問題は解決しないが、AMLOは露天商たちを立ち退かせることにあまり痛痒を覚えないようである。彼にとって自分の刷新計画に水をさされないことが重要なのである。[32] 2001年、大統領フォックスとAMLOの話し合いにおいて、歴史伝統ゾーン再開発は民間、市、連邦政府の３者が構成する委員会が担うことになり、委員長はカルロス・スリムに決まった。このジョイント・ベンチャーは企業家、商人、市役所には有益であったが、フォックスは蚊帳の外に置かれ、メリットを受けていない。民主革命党員であるAMLOは企業家との連携において大統領より上手だった。では委員長に就任したカルロス・スリムとは一体どのような人物なのであろうか。

カルロス・スリムの逸話には事欠かない。公的場にはあまり姿を現さない謎めいた人物であるためこれまでも様々な風評が立った。触れるものを何でも金に換える「ミダス王」の異名を持つ反面、オーギュスト・ロダンの著名な収集家でもあり、メキシコ古代の絵文書にも精通している。2004年度の資産は238億ドルと試算され世界富豪ランキング第４位につけ、ラテンアメリカ一の大資産家である。世界一の富豪、ビル・ゲイツとは提携して、インターネット・ポータルのTIMSN社を米国に創設した。支援する奨学基金の基調演説にビル・クリントンを招聘し、マスメディアの話題をさらったこともあった。

1939年生まれのレバノン移民の子、スリムは、父フリアンが旧市街地に所有していた「東方の星」という小間物店で８歳のときから商いを覚えた。幼年時代から帳簿兼メモ帳のノートを持ち歩き、気付いた点をメモした。15歳のときにはバナメックスの44株と5,523ペソが入った財布を所有していた。彼の父はメキシコ革命で荒廃した市街地の不動産を安値で買い取り資産を増やした。UNAMの工学部を卒業後、26歳のときに父親から譲り受けた財産を元手にカルソ不動産を興し、百万平方メートル以上に及ぶ土地やアパート群を旧市街地に獲得した。1970年、ハリートス飲料を、1976年、ガーラス印刷を買収した。

ロペス・ポルティーリョの経済危機の時代には資本の外国逃避が続いたが、メキシコ最大のタバコメーカーのシガタム、ゴム会社のセンテナリオ・ゴム、レストランチェーンのサンボーンズの他、衣料メーカーや銅鉱山会社等を次々に買収していった。このように1980年代の石油価格の下落と政府の財政破綻の中、倒産企業を買収してカルソ・グループの枢軸となるカルソ不動産を拡大したのである。

しかし、カルロス・スリムを世界の大富豪に伸し上げたのは、メキシコ電話公社を買収し、テルメックス（Telmex）を創設したことであろう。1990年、ネオリベラリズムの強烈な信奉者であった大統領カルロス・サリーナスは、1984年の大地震で電話網を破壊され、錆付いたメキシコ電話公社を野党の大反対にもかかわらず競売にかけた。カルソ、ベル・インターナショナル、フランス・ケーブル・ラジオのコンソシアムが11月に落札した。他の３グループが１株63～78セントを提示したのに対して、カルソは80セントを提示し、総額17億5,700万ドルで入札した。落札に際し、スリムは支払いの一部を将来Telmexから上がる利益から分割で支払うことが承認されたとして非難された。[33] 現在、Telmexの価格は200億ドルと試算され、従業員数25万人を擁し、メキシコでの電話寡占率は90%に及ぶ。その子会社アメリカ・モビルはラテンアメリカ最大の携帯電話会社であり、米国のヒスパニック層の携帯電話市場に浸透しつつある。アルゼンチンのテクテレやメトロレッド、ブラジル、チリの企業も買収し、コロンビア、ペルー、エクアドル、グアテマラ、エル・サルバドル、ニカラグアの電話産業にも参入した。

スリムはテルメックス、携帯電話のテルセル、インブルサ銀行、スリム証券、カルソ・グループ等の社長を務め、庶民にも馴染みの深い百貨店のシアーズ、ケーキチェーンのエル・グロボ、レストランのサンボーンズ、音楽関係企業ミックス・アップ、ディスコランディア、フェリア・デル・ディスコ の経営者でもあったが、2004年、120億ドル以上の財産を息子たちに残して引退し、テルメックスやカルソの終身名誉会長に就任した。[34]

スリムの成功の理由にはその勤勉な性格、機を見るに敏な商才、大胆な決断力やレバノン移民家族の団結力等が上げられるが、従来のメキシコ企業家とは異なる一面を忘れてはならない。それはアメリカ流の近代的経済学に呪縛されていない点である。メキシコ経済界には昔からアメリカ式のビジネスモデルを称賛しそれを模倣する傾向があったが、北米自由貿易協定（NAFTA）締結以降はさらにその傾向が強まった。メキシコの著名な実業家や資産家の師弟は、ロレンソ・サンブラノやガルサ・サダのように、ほとんどがアメリカのビジネス・スクールへ留学し、アメリカ流の経営感覚で会社を経営しているが、国際的企業として成功しているわけではない。[35] メキシコの名門家系が国内で比較的安定した地位を保持できているのは、様々な特権による庇護や地縁血縁関係の活用によるものである。スリムはグローバル化を称賛し民族資本家を軽視するテクノクラートに批判的で、米国一辺倒の経済政策に距離を置いている。しかし、スリムの経済政策にたいする考えは曖昧で、フォックスの経済モデルを批判したかと思えば、AMLOの財政出動の大きいポピュリズムにも賛同していない。80年代の経済危機に国内資本が一斉に海外に逃避したとき、スリムはその隙をついて底値で市街地の土地を買い取り、破産したかつての優良企業を買収して飛躍的にカルソ・グループを成長させた。彼の経済感覚は幼少の小間物屋の商い以降身につけた一種、嗅覚的なものであろう。旧市街地の荒廃した不動産の潜在的価値に目をつけたのはスリムしかいなかった。アメリカ流の経営感覚でしか経済がみえない御曹司たちには想像できない投資であった。メキシコ電話公社入札前に、落札した場合は少なくとも２世代はスリム家が同社を掌握することを家族全員が誓約したというエピソードは、スリムが民族主義的精神の実業家であることの証左であろう。[36]

ダウンタウンの不動産業者、ホテル業者、レストラン経営者、商店主たちは、旧市街区とレフォルマ通り再開発計画の活性化を心待ちにしていた。そして指定地区で最大のメリットを受けたのはカルロス・スリムとその一族である。前述したように、カルソ・グループは再開発地域に多くの不動産、レストラン、

音楽産業を所有しているからである。メキシコ市長AMLOが主導したこのプロジェクトにスリムが賛意を表明したのは、一に経済的利益追求、二に生まれ育った街への愛着であろう。政界の大物との親交はあるが、フォックスのように実業界から政界に打って出る野心はまったくない。どちらかと言えば、政界には積極的に関わらない実業家であり、ラウル・サリーナス（元大統領カルロス・サリーナスの兄）の逮捕を見て息子たちに「政治家と距離を置くように忠告した」と伝えられている。スリムのクアウテモクというアステカの英雄への関心の有無は不明であるが、AMLOのレフォルマ回廊再開発に賛同した理由の一つは、生まれ育った伝統地区の歴史的再生に貢献することによる治安の回復、経済的発展、雇用促進だったのかもしれない。

Ⅵ. メキシコ市長、アンドレス・マヌエル・ロペス・オブラドール（AMLO）の戦略

メキシコ市長AMLOは、カルロス・スリムを軸にしたメキシコ経済界にレフォルマ回廊再開発の協力を要請し、受け入れられた。市長は企業家との同盟が市政の発展の基礎となることを熟知していた。AMLOは、スリムが政敵サリーナスの政権期に事業を大幅に拡大したことを知りながら、彼のプロジェクトへの参加を依頼した。スリムが荒廃した旧市街区に多数の不動産を所有しており、その地区の再開発はこのレバノン移民の事業に多大なメリットをもたらすゆえに自分の計画に協力することを見抜いていた。歴代市長は旧市街区を放置してきた。ソカロ以東の建物の荒廃、街路の不衛生さ、治安の悪化等については近年、メキシコ市の解決すべき懸案として俎上に載せられてきたが、有産階級の居住区である市の西南部の開発が優先され、等閑にされてきた。商店主、ホテル業者、レストラン経営者はダウンタウンの再開発計画を長年待ち望んできたのである。AMLOが推進した再開発プロジェクトによって、景観、上下水道、歩道、緑地帯、街路樹、照明、地下ケーブル、治安などすべてが改善された。AMLOがスリムと提携して実施した都市計画は市と国の心臓部を蘇生

させたと言える。

民間企業の潤沢な投資による街の活性化が新たな雇用を創設し、それが下層階級を救済するという解釈もできるが、再開発プロジェクトが市民や政治家の全面的支持を糾合したものでなかったことはすでに述べた。レフォルマ再生によって潤ったのは庶民より富裕階級である。レフォルマは市と国の顔であるにもかかわらず、治安の悪化から観光業は衰退していた。観光客はダウンタウンには立ち寄らず、郊外のテオティワカン遺跡やソチミルコの舟遊びに向かう傾向が強かった。メキシコ市の魅力が失せたことによって、カンクンやアカプルコのリゾートに直行する外国人観光客も少なくなかった。再生された地区は重要なオフィス・ビルがいくつも含まれる。市役所財政局のデータによれば、レフォルマ―ソカロ間の不動産は再開発後、54%上昇している。[37] それに引き換え、低所得者が住むネサワルコヨトルやアラゴンなど道路舗装や上下水道などのインフラの早急な整備が必要な市の東部は放置されている。レフォルマ通りの花壇の花を季節ごとに植え替える余裕があるなら、貧困地区の改善に予算を回すのが行政の責任ではないのかという市民の声、高級住宅地へ高速道路を敷設するより低所得者住宅地への地下鉄開設が先だという要求は強い。AMLOは選挙で「貧しい人々優先！」という公約を掲げ、貧困層と中産階層の広範な支持を受けメキシコ市長に当選したが、彼らは忘却され、金持ち優遇策に走っていると批判するマスメディアも少なくない。

南部チアパス州で1994年に武装蜂起をしたサパティスタ民族解放軍（EZLN）も昨今、AMLOを批判している。EZLNとPRDとは当初良好な関係にあったが、EZLNが要求した先住民自治を盛り込んだ憲法案にPRDが反対してから、両者の関係は冷え込んだ。EZLNのスポークスマン、マルコスは、「AMLO は商工業界の大資本と結託して首都で新たな建設を計画している。市長は警察が統制する都市を提案し、金持ちが第一ではなく唯一である都市に必要なインフラ整備を計画している。第１段階は首都の中心部に住居の建設、第２段階はカルロス・スリム主導の歴史的市街区再生財団の結成、第３段階は３

つの大計画、レフォルマ、アラメダ、旧市街区の再開発である。スリムがこの区域の土地や古いビルを買収していると伝えられている。都市のこれ以上の郊外発展は困難という理由で、郊外の一般住居の建設は中止され、ダウンタウンの３地区はグローバルシティのモデルとなるであろう。」とメキシコ市長の政策を非難した。[38)]

そのような批判にもかかわらず、AMLOは低所得者層の圧倒的支持を集めている。第３世界の民主主義世界では今日のパンを求める貧しい人々に長期スパンのマクロ経済学を説いても、選挙戦では失敗する。貧者にとっては日々最低のトルティージャを供給してくれる政治家が望まれている。メキシコでは肌が白いほど経済的地位は高い。PRIは民衆の前にメスティーソ的イメージを創り出すことに努めたが、サリーナス政権以降登場したテクノクラートの姓はかつての名門か外国人のもので、彼らは米国の名門大学の大学院卒業者である。一方PANはつねに、反動的、保守的、貴族的ブルジョアと非難されてきた。ポルフィリアートの名門家系、Braniff、Creel、Terrazas、Escandónなどの出身者が多く、最近では民衆の支持を以前よりは獲得しているが、以前として下層階級から遊離した伝統的中小のキリスト教民主主義者の政党である。Creel、Clariond、Derbezはメスティーソのメキシコを代表していない。それゆえに白人によって搾取されてきた貧しい人々の信用を得ていない。[39)] このタバスコ州出身の気さくな政治家は、貧者の怨念、羨望、飢餓を集約し、利用する手立てを知っているのである。市長は当選後も普通のアパートに住み、市庁には大衆車の日産ツルで出勤する。公約通りに老齢者援助、身体障害者保護、医療サービスの向上と薬の無料化、雇用の促進、義務教育の徹底化、腐敗と脱税防止、女性の登用等を積極的に推進した。[40)] 実際、彼の政策の恩恵を受けた市民は多いのである。また、この民主革命党（PRD）の左翼政治家はメキシコ上流社会の受けもいい。前バナメックスの頭取ハープ・ヘルとの朝食やマスメディア王であるテレビサの会長アスカラガ・ヘアンが自家用ジェト機でAMLOの妻の葬儀に駆けつけたことがそれを物語っている。彼ら富裕層は、AMLO

が経済のグローバル化に決して反対ではなくその世界的潮流をメキシコに適合した方式で取り入れようとしていることに気づいているのである。しかし、AMLOはこのようなコンツェルンに対して緊密な関係を求めて近づきすぎてもいないし、民衆の怨念から遠ざかってもいない。富者と貧者の利害を収斂させることが重要であり、公共的、私的、社会的３セクターの収斂を模索しようとしている。国民、企業家、教会、組合、社会組織の代表が話し合いのテーブルにつき、国の発展のために全員の合意形成を求めている。

AMLOの掲げる公約は、弱者救済的政策が多いために財政出動の大きいポピュリズム的性格を帯びている。それは彼が90年代以降顕著になったPRIやPANのネオリベラリズム的経済政策に対抗するために打ち出した政策といえる。彼自身、元はと言えばPRIの党員であったが、党の政策への違和感や党内抗争の末、党を出て、クアウテモク・カルデナスが結党した民主革命党（PRD）に合流した。19世紀以来の伝統的ブルジョアと20世紀初頭のメキシコ革命後生まれた野心家の間には当初親密な関係は存在しなかったが、ラサロ・カルデナスが主導してPRIの前身のメキシコ革命党（PRM）を結成し、新興革命家と伝統的特権階級の間に実用的同盟を成立させた。しかし、経済の発展に伴いPRIは保守化し、党に吸収されなかった中・下層階級の民意を掬い上げる能力を喪失していった。PRI体制から落ちこぼれた人々の不満の受け皿になったのが、PRDである。AMLOはネオリベラリズムを排撃するが、マルクス主義的表現は用いないし、プロレタリアートや階級闘争にも触れない。極端なイデオロギーに偏ると支持を失うことを知っている。そのような複雑な政治的背景を持つ民主革命党員のメキシコ市長には政敵が多い。特にPRIの元大統領カルロス・サリーナスとの確執は巷間でよく知られている。[41)]

AMLOが政敵やマスメディアで批判される最大の理由は、彼が2006年７月に実施された大統領戦での最有力馬だったからである。現大統領フォックスが所属する保守的カトリック政党PANと巻き返しを狙うPRIにとって、メキシコ市ばかりか全国でも広範な支持を集め、世論調査では常に他候補を引き離し

ているAMLOの存在は大きな脅威であった。敵対陣営が彼の人気を誹謗中傷するような戦略が取るのは当然のことである。PRIとPANの議員たちはレフォルマ回廊再開発計画そのものに反対したというより、市政で市長の足元を掬うことによって大統領候補者としての資質を貶めようとしたというほうが正しいであろう。

回廊再開発工事が進行中の2004年５月、強引な土地の市有化、与党PRDの党幹部に数千件の住宅ローンの貸付、入札なしで特定の土木業者への工事委託などAMLO市政はマスメディアの集中砲火を浴びていたが、そこにエル・エンシノ問題が浮上した。私有地エル・エンシノの市による公有化は、ABC病院へのアクセスを確保し、新興の富裕な住宅地サンタフェの寡占的繁栄を意図するものであると見なされ、裁判所は工事差し止めの判断を下したのである。しかし、市は度重なる裁判所の要請にもかかわらず、裁判官の命令に服さなかった。最高裁も元の所有者の主張を認め、市の土地買収を不法と判断した。そして、この不正行為が政治家としての資質に欠けるとして市長の特権剥奪の要求が反対派から巻き起こった。連邦検察庁が要求した市長の不逮捕特権の剥奪について議会では白熱した議論が展開され、新聞やテレビが「特権剥奪」（desafuero）問題を取り上げない日はなかった。

2004年７月４日、PRDの党員は全国規模でメキシコ市長AMLOが不逮捕権を剥奪され、2006年の大統領選挙への出馬が不可能になることを阻止するために、市長を応援する大キャンペーンを実施し、AMLOの特権剥奪に反対するという横断幕をソカロ広場に掲げた。そして市長の特権剥奪が決定されれば、大きな社会混乱が引き起こされると警告した。[42] ８月29日、市長の特権剥奪に反対してPRDは左翼による大規模なデモ行進をメキシコ市で展開した。PRD40万人、国際機関から15～30万人が参加した。ソカロ広場に設けられたひな壇に顔をそろえたPRDの州知事、連邦・地方議員、市町村長、党の幹部を前にして、市長は激高して「連邦検察庁が訴えているエル・エンシノの土地に関して、自分は無実である。すべては私が2006年の大統領選挙に出馬できな

くするために仕組まれた罠である。」と訴えた。[43] PRDは最高裁に市長の特権剥奪は違憲であることを認めるように要求していたが、９月12日、最高裁はこれを却下、逆に裁判所の判決を無視する市長に気まぐれな政治支配を止めるように警告した。[44]

親AMLO派対反AMLO派の対立、市役所と連邦政府との争いは泥沼化した。市長は対抗措置として自己弁護と反対派批判のために、毎朝の記者会見を恒例化した。AMLOは市民に彼にたいする不逮捕権という政治特権を剥奪しようとする連邦検察庁の要請に反対し、議会がこれを認めないようにする運動を始めるよう呼びかけた。市の公務員はこれに呼応して広範な特権剥奪反対運動「No al Desafuero」を開始した。市民の熱烈な支援を背景に、強気の市長は大統領選に出馬する意思を表明し、刑務所からでも選挙運動を行うと宣言した。2005年４月、フォックスは特権剥奪に反対する内外の圧力に抗しきれず、連邦検察庁長官ラファエル・マセドの辞任を受理した。新長官に任命されたダニエル・カベサ・デバカはAMLOへの刑事告発を取り下げた。その後、AMLOは７月、メキシコ市長を辞任し、９月にPRDの大統領候補に指名され、12月には連帯、労働党、PRDの３党が結成した連合体の大統領候補に指名された。そして「すべての人の幸せのために」というスローガンを掲げて、大統領戦のキャンペーンを行ったが、2006年７月の大統領選挙で、得票率0.58%という僅差で中道右派PANの候補者カルデロンに敗れた。

結　び

最近メキシコに行き、違和感というか驚きを覚えたことがある。市のメインストリートのレフォルマ通りを散策していたときのことである。アメリカ人の若い女性観光客に警邏中の警察官が流暢な英語で応対していたのである。筆者のこれまでの経験からすれば、メキシコの警察官が街頭で英語を使い外国人に観光地について説明するなど考えられなかった。彼らはAMLOによって導入されたツーリスト・ポリスというのだそうだ。レフォルマ通りに限れば、確か

に外国人観光客の数は増加し、物乞いの数は減少した。実際、クアウテモク銅像は移転後のほうが配置、見栄えも格段に改良され、旧交差点付近の交通渋滞も緩和された。

2004年のクアウテモク銅像移転によって三の問題点が提起されたと言える。ひとつは文化遺産保存に関する学識者・文化人の対応、もうひとつは行政と民間資本の提携、最後は住民運動と行政の関係である。

移転問題に関して、有識者の意見は分かれたが、反対は少なくUNAMの建築学・土木学の専門家やINAHの歴史学・考古学の研究者の間では賛成派が多数を占めた。土木技師の立場からすれば、新素材の混合セメントを基礎に用いる工事は魅力的であったろうし、建築家にとっては新ロータリーの設計を全面的に任され、日頃の研究成果を実践できる絶好の機会であったろう。歴史的アイデンティティなどにあまり関心のない技術者が、市の財政負担によって推進された銅像移転と新ロータリーの建設を、専門性を発揮する機会と捉え、計画に協力したことは当然のことかもしれない。そして、市が銅像を「元の場所に戻す」という歴史的口実を有効に利用し、有識者の反対を巧妙に封じたことも看過すべきではない。市の観光局が取った専門家に専門家をぶつける戦略が功を奏したと言える。

しかし、クアウテモクというメキシコ人にとって不可欠なアイデンティティである歴史記念物を移転するに当たり、古代の先住民文化を評価してきた歴史家や考古学者の間からほとんど反対の声が上がらなかったことは、従来の歴史性が研究者の関心を呼ばなくなり、歴史精神が衰弱化している証しかもしれない。かつては物議を醸したような歴史記念物の建設や移転問題も、現代においては、たかが銅像の移転ぐらいでは研究者の間に国のアイデンティティの危機意識を喚起できなくなっている。行政の計画に便乗して、歴史家の存在感を示し、修復家の仕事を増やすほうがより現実的な選択肢となっているのだろう。文部省の特定的文化予算の枠組みとは別に、行政と協力して文化遺産の刷新を図る手法は今後も採用され、経済活性化を図る行政と文化を擁護する研究者間

の協働は将来も進むであろう。しかし、両者の協働が文化遺産の保存に貢献できるとしても、もし計画が経済効果優先主義に陥る場合には、研究者から確実に過去に培われた精神性を奪う結果になることを忘れてはならない。文化遺産や遺跡の観光化は観光立国メキシコにとって重要な視点であるが、歴史家は安易な歴史の変更や改竄には同意すべきではない。

第二の点、行政と民間資本の提携に関しては、ポピュリズム政治家AMLOと民族資本家カルロス・スリムを核とした実業家との官民の協調体制が取られた。AMLOが推進したレフォルマ回廊の再開発は、経済の活性化、治安の回復、交通渋滞の解消という大きなメリットをもたらした。一方スリムは、再開発地域に多くの不動産を所有し、観光やレストラン等の多様なサービス産業を抱えており、市のプロジェクトによって大きな利益を享受した。銅像移転を含めたレフォルマ整備計画は市長とラテンアメリカ第一の富豪の両者にとって、共通の利益をもたらすが故に、両者の同盟を可能にした。レフォルマ計画で示したAMLOのしたたかな手腕は、彼が中産階級と低所得者層だけの支持を受ける単純なポピュリストではないことの証明である。彼が提案した都市計画は自分が一市長ではなく、一国の宰相たる器を具備していることを重層的階級社会から構成されるメキシコ国民に印象づけた点でも重要である。事実、その後、AMLOは着実に大統領候補への道を歩み始めたのである。

第三の点、住民運動と行政の関係については、伝統ゾーンの保存と工事の騒音発生を因として銅像移転に反対したレフォルマ近隣の市民の声を十分に考慮せずに、市はレフォルマ回廊の改修と銅像移転を予定通り強行した。移転計画反対の先頭に立った「レフォルマ救出会」は当初、ハーバマスが想定した「インフォーマルなコミュニケーションの網の目」の結節点を構築する絶好の機会と思われたが[45]、住民を結束させ広範な市民の輪を拡大することはできなかった。ネットワーク構築失敗の原因のひとつは、反対派はレフォルマ通り沿いに住む市民の一部であり、大多数の周辺住民がクアウテモクのもつ伝統的アイデンティティの維持より、回廊整備による治安の回復と観光化による経済効果を

選択したためである。別言すれば、民間資本と連携した自治体の都市行政に住民運動が敗北した事例とも言える。もうひとつの原因は大半の地域住民が、「救出会」の真意が敵対する政党に所属する市長の政策に反対する運動であることを察知したからである。歴史記念物保存運動が市の与党と野党間の政争の具と化したことが、一般市民の反発を招くと同時に彼らの関心を希薄化させたのである。

実際、PRDのAMLO市政に反感を持つPRIとPANの市会議員が「救出会」の中心メンバーであった。「救出会」は全市民の公共性を考えて行動を起こしたのではなく、彼らの敵対者の評判を貶め、あわよくば、失脚させるためにクアウテモクを利用したと言えよう。突発的に形成された「救出会」の短期的反対運動とその消失は、ハーバマスが言うところの「市民が共通のものごとについてじっくりと議論を行う空間であり、したがって討議という相互作用が行われる制度化された舞台」[46]である公共圏をメキシコ社会が未だ構築していないことの例証であろう。

注

1）山崎眞次、pp.220-225

2）メキシコ市観光局の資料によれば、最初のクアウテモク像はフアレス時代の1869年、ビガ通りに建設された。

3）García Quintana, pp.11-12

4）Ibid., p.25。銅像建設の経緯については「偉大な祖国のシンボル化」という特集がレフォルマ紙で組まれた：「ヨーロッパで美術の修行をしたノレニャは、雄雄しく悲しみを帯びたグレコローマン調の銅像を設計した。クアウテモクの捕囚はノレニャの、王の拷問は弟子のガブリエル・ゲラの、台座のジャガーはエピタシオ・カルボの作である。美学生ヘスス・コントレラスは銅像の鋳造を担当した際に、坩堝が沸騰し火傷した。銅像を取り囲む環状歩道を含むロータリーは直径が90メートルあった。1945年、メキシコ市は南西に拡大していたために、中心部の歴史ゾーンが廃れ始めた。そこで建築家のマリオ・パニは、廃屋が目立つこの地域に巨大ロータリーを建設することで世界に誇るメキシコ市を世界的都市に位置づけることが可能であり、そのことによって活性化を図ろうとした。彼の計画はクアウテモク銅像を西に88メートル移動させ、世界一長い大通りであるレフォルマとインスルヘンテスの交差点

に設置しようとするものであった。新ロータリーは12本の塔が配置され、地下駐車場を備えた、ローマのサンピエトロ広場を凌ぐ直径300メートルのものが設計された。このことはこの交差点が国の臍になることを意味していた。同時にクアウテモク銅像は、成長する若い国家における先住民アイデンティティのシンボルを表していた。近隣住民の不満やミゲル・アラマンが大統領に就任する喧騒に巨大プロジェクトは掻き消されそうになったが、計画は大幅に縮小されて実現された。しかし、ロータリーを拡張しなかったので、環状歩道が犠牲になった。そのため『誰もわざわざ危険を冒して歴史記念物を見に行くことはなかった。』とINAHの歴史記念物技術支援局の局長ビセンテ・フロレスは語っている。」Reforma, 2004/6/9

5）市報437号、2004/5/4

6）市報520号、2004/6/1

7）市報700号、2004/7/23

8）市報737号、2004/8/5。実際に道路が封鎖されたのは、６日（金）の22時で、移転作業が開始されたのが７日（土）の午前７時、終了したのは８日（日）の14時半である。

9）市報763号、2004/8/13

10) El Universal, 2003/12/11

11) El Universal, 2004/5/5

12) El Universal, 2004/5/6

13) El Universal, 2004/5/17

14) El Universal, 2004/6/2

15) El Universal, 2004/6/4。実はアレハンドロ・ガラテ・ウルチュルトゥはPRIの党員で、PRIのマウリシオ・ロペスとPANのマリアノ・ゴメスを同伴して記者会見に臨んでいた。移転反対派の顔ぶれを見ると、市議会の野党であるPRIとPANによって構成されている。筆者が、アレハンドロ・ガラテ・ウルチュルトゥ氏（元メキシコ市長エルネスト・ウルチュルトゥの甥）に取材をするうちに、反対派は、PRD（メキシコ革命党）の市長AMLOが推進する市街地再開発プロジェクトに党利党略で反対しているのではないかという疑問が浮かんだ。反対派の野党と賛成派の与党という対立の構図が銅像移転に関して存在していたと言える。

16) El Universal, 2004/6/22

17) El Universal, 2004/7/24

18) El Universal, 2004/8/8

19) Ciudad, 2004/12/11。観光局戦略計画部のフランシスコ・ルイスは、インスルヘンテスからブカレリ通りまでの再開発に１億3,600万ペソの費用がかかったことを公表した。工事の内容は水硬セメントによる道路舗装、中央分離帯の改修、照明、信号機、標識の交換、ベンチ、電話ボックス、屑籠、宝くじ売り場の設置、上下水道の改修、電線の増設等である。Reforma, 2004/12/12。最後の仕上げとして、400人の労働者が銅像・平石の洗浄や緑地・植え込みの整備を行ったが、聖母グアダルーペ祭と重なっ

たために、信仰心の篤い15名の作業員が欠勤した。Reforma, 2004/12/13

20) Ciudad, 2004/12/14。レフォルマ紙は、市がレフォルマ再開発の一環としてテラス・カフェ、映画館、レストラン等の設置許可を検討中であることを報じている。Reforma, 2004/12/14

21) Arquired, 2004/3/4

22) La Crónica de hoy, 2004/6/4

23) La Crónica de hoy, 2004/6/18

24) La Crónica de hoy, 2004/6/22

25) Foro General, Mario Alberto Rodríguez González, 2004-7-5

26) これらの批判にたいして、観光局長のカンポスは、「銅像移転は思いつきや成り行きで決定されたのではなく、レフォルマ活性化計画の一環として市がUNAMの建築学部に委任したものである。１時間に９千台の車が通過することによる渋滞とそれによる歩行者の危険は計り知れない。“現実的理由”から移転は機能的で有益なものである。ミゲル・レルド・デ・テハダ大統領時代の都市区画と銅像周辺広場の環境保全を尊重する。INAHの歴史記念物審議会は１月にプロジェクトを承認したが、移転時の危険を保障する保険加入を要請した。市は一般保険には加入しているので、やるべきは保険契約書の見直しである。」と反論した。フェリペ・レアルは、「移転には反対がつきものであるが、今回は、像は元の場所に戻すポジティブな移動である。新ロータリーには大規模なコンクリートの土台を埋め込む。地下40メートルまでの探査した結果、地質は現在の場所と同じで、地盤沈下は避けられる。」と建築学的見解を述べた。Vértigo, 2004/7/3。移転に伴う保険に関しては、市は銅像、台座、ブロンズ片に3,800万ペソの保険を、移転の損害保険に131,500ペソの保険をかけた。Reforma, 2004/7/25。

27) Reforma, 2004/6/6。レフォルマ紙は「INAHが条件付け」という見出しで、INAHの歴史記念物審議会と歴史記念物外部諮問委員会は、すべての安全確認が技術的に証明されれば銅像は移転可能であるという見解を出した、と記している。Reforma, 2004/6/9。反対派の批判に対して建築家フェリペ・レアルは、「クアウテモクの栄誉再び」というレフォルマ紙の見出しで次のように反論している。「新ロータリーは直径が90メートルには満たないが、1949年に移転した際に削除された環状歩道と緑地が復活する。７月15日に市役所によって提案されたロータリーの再開発計画には上院会場の建設や老朽化したユニバーシティ・クラブの解体など、周辺ビルの活性化も含まれる。他のレフォルマ沿いのモニュメントは何らかの被害を受けてきたが、クアウテモクはメキシコ先住民の血肉であるために悪戯から免れてきた。独立の象徴であるエンゼル像は指２本と祈念用香炉が盗まれ、コロンブス像は毎年「民族の日」である10月12日には投石され、ダイアナ像はブラジャー等の下着を着せられた上に落書きまでされた。唯一誰も手をつけていないのが、クアウテモクの銅像である。移転の準備は整い、今やINAHの認可が下りるのを待つばかりである。」Reforma,

2004/7/23。

28) 環境保護局長のセインバウンの夫は、カルロス・アウマダから賄賂を受け取る現場をビデオ撮影された汚職役人カルロス・イマスであることをラ・クリシス紙は暴露している。Lacrisis, 2005/3/6

29) Razón y Acción, 2005-3-6。レフォルマ通り再開発で独自開発した特別な混合セメントを使用したCEMEX社の会社報によれば、再開発にINAHとUNAMの建築学部のほかに以下の16社が参加した：Luz y Fuerza,Teléfono de México, CEMEX Concretos, CAV Diseño de Ingeniería, Constructora MAHF, ICSA(Ingeniería y Consultoría), FSC Supervisión, Experiencia Inmobiliaira Total ÉXITO, DII(Desarrollo Integral de Inmuebles), Vida Verde, Transportes Tellería, PIASA(Procesos de Ingeniería Aplicada), Grúas Salas, Lombardo Construcciones, Constructora Ruviana y Automatizaciones en Procesos Industriales. Noticias, Construcción y Tecnología, 2005 enero

30) Boletín 63, Fideicomiso del Centro Histórico, 2003/1/21

31) Secretaría de Desarrollo nómico del GDF, Actividades, Comunicasos de prensa, 2004/4/27, 2004/12/9

32) Trelles y Zagal, p.57

33) ¿Quién es Carlos Slim, el hombre más rico de América y propietario de Telmex?, Noticiasdot.com. Carlos Slim Helu, Terra, pp.1-2。スリムが落札した裏には大統領の名義貸付人であったことがささやかれている。これらの非難に対して、彼は他社も同様の情報に接することができたし、落札価格は当時のTelmexの株総額６億800万ドルを上回っていた。また、フランス・ケーブル・ラジオは世界の通信産業の中で最も秀でていたし、サザンウエスタン・ベルは米国で最も効率的サービスを提供する会社であると弁明した。

34) スリムはメキシコ文化の理解者でもあり、歴史家のフェルナンド・ベニテスから絵文書解釈の手ほどきを受けたことが、アラビア語で「星」を意味するソウマヤ美術館創設の端緒となった。

35) メキシコの一般的上流階級、特にモンテレイグループと異なり、スリムの息子たちはハーバードやスタンフォードなどのアメリカの有名大学に進学していない。

36) ロペス・ポルティーリョの経済危機の時代に、国内産業に投資し続けた理由を、「自分の生まれた国であり、子どもたちの住んでいる国だから」と答えているスリムの言葉を額面通りに受け取ることはできないが、メキシコ企業人や資産家の大半が利己的にその資産を国外に逃避させたときに、少なくとも危機を商機と捉えて国内に踏みとどまったことは評価しなければならない。

37) Trelles y Zagal, p.59

38) Cartas y comunidados del EZLN, 2003/2/28

39) Trelles y Zagal, p.45

40) López Obrador, p.79。AMLO は「もうひとつの国家計画：新の改革に向かって」を

刊行したが、11人の専門家はこのプロジェクトが実施不可能であるという結論を出した。過去の歴史に基礎を置いたナショナリズムを基盤としたプロジェクトは新しいものではなく、従来のメキシコの歴史を繰り返すものであり、石油産業を中心に国家の経済発展を達成することは不可能であり、国の関係を米国との関係だけで位置づけて、グローバル的な見方が全くないと総括している。Reforma, 2004/11/30。2000年にAMLO市政が発足したとき、15人の局長のうち８名が女性であった。Ibarra Aguirre, p.26

41) 2006年３月、サリーナスがマサチューセッツのMITでの講演で、大統領選を前にしてメキシコの民主主義が“危機”に陥っていると政治的カウディーリョの回帰を危ぶむ話をしたのに対して、AMLOは元大統領に支給されている恩給が廃止の“危機”にあることを認識すべきであると痛烈に反撃した。El Universal, 2006/3/12

42) Reforma, 2004/7/5

43) Reforma, 2004/8/30

44) Reforma, 2004/9/13

45) マッカーシー、トーマス、p.60

46) フレイザー、ナンシー、p.119

参考文献

フレイザー、ナンシー「公共圏の再考：既存の民主主義批判のために」、マッカーシー、トーマス「実践的な討議：道徳と政治の関係」。キャルホーン、クレイグ編、ハーバマスと公共圏、山本啓・新田滋訳、未来社、1999

García Quintana, Josefina, Cuauhtémoc en el siglo XIX, UNAM, 1976

Ibrra Aguirre, Eduardo, Complot contra un proyecto de Nación, Ediciones Quinto Sol, 2004

López Obrador, Andrés Manuel, Un proyecto alternativo de Nación, Grijalbo, 2005

Trelles, Alejandro y Zagal, Héctor, AMLO, Historia política y personal del Jefe de gobierno del D.F., Plaza Janés, 2004

山崎眞次、メキシコ、民族の誇りと闘い、新評論、2004

新聞・市報・会社報・コミュニケ

Arquired, 2004/3/4

Boletín de GDF, 2004/5/4-2004/8/14

Cartas y comunidados del EZLN, 2003/2/28

Ciudad, 2004/12/11, 2004/12/14

El Universal, 2003/12/11-2006/3/12

Foro General, Mario Alberto Rodríguez González, 2004-7-5

Lacrisis, 2005-3-6

La Crónica de hoy, 2004/6/4-2004/6/22
Noticias, Construcción y Tecnología, 2005 enero
Noticiasdot.com, 2003/12/15 ¿Quién es Carlos Slim, el hombre más rico de América y propietario de Telmex?
Razón y Acción, 2005/3/6
Reforma, 2004/6/6-2004/12/14
Secretaría de Desarrollo nómico del GDF, Actividades, Comunicasos de prensa, 2004/4/27, 2004/12/9